

特集「繰り返し“自然・命・平和”を言葉に」

▶ 辺野古の海岸に立つ。「この海は豊かな海。埋め立てたら二度と戻らない」地元のおばさんの真剣な言葉。H25・2・3



発行日 2014. 2. 28
第 226 号
(第 1 回発行)
1974年4月1日
発行所 北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが新しくなりました！
施設の概要や理念、利用者の様子、園長からのお知らせ等、盛りたくさん！ぜひアクセスしてみてください。
ホームページアドレス
<http://www.hokuso-ikuseien.org/>
Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp



母子像 近藤益雄

ちえのおくれた
あの子が
こねてつくった
粘土の母と子の像
子は母にいだかれて いるが
ただ 胴だけで
手もない 足もない
しかし
ただ ひとつ
ちいさな 口だけが あった
その口は
母の胸に
くっついていて
乳をすうてすいやまぬこどもなのか
あわれとおくに母はいるこの子よ

明治図書
近藤益雄著書集より

障害児者教育に命を捧げた近藤益雄さんは、あたたかくやさしい言葉でこの人たちへの思いを言葉にした。『近藤益雄詩集』である。上記の母子像は昭和28年の作。子どもたちの求めるものが母の愛でありやさしさであることが率直に伝わってくる。何て素晴らしい詩だこと。益雄さんの息子、近藤原理さんは父の実践と重なる形で自宅(なずな園)に障害者を受け入れその日々(足掛け40年に及ぶ)をさまざまな形で世に問うた。『なずなの日々』等著作多数。時代は移り今、福祉は契約制度という形に変質。その実践は経済活動的な因子を引き受けると重なり「こんなはずではなかった」の思いを引きずりながら、この人たちと日々を重ねている。

今回この小紙は特集『繰り返し、自然・命・平和』を言葉に』とした。益雄さんの息子であり、原理さんの兄である歌(アキラ)さんは長崎原爆で亡くなった。「原爆許すまじ」「平和あつての福祉」。原理さんはそのことを心に刻み、共に生きる社会を発信し続けている。長崎原爆の日の8月9日を間に2泊3日で開かれた原理先生主催「なずな障害者福祉研修会」。私も何回か参加させてもらった。その仲間一人に沖縄の砂川さんがいる。難しい時代に差し掛かっている日本。沖縄はあらゆることで日本の戦争と平和を考える原点。その沖縄を心から愛する沖縄人から皆様にメッセージ(※3pに掲載)。(武井)

平成26年度を迎えるにあたって

副園長 白 樫 久 子

現在、昭和49年から生活の場であった「本館」(椎の木寮・食堂・風呂場他)、昭和58年に竣工した「高齢者棟」(落の棟)、そして平成元年に25名増員するために増築した「新棟」(天馬寮・菜の花寮・つくし寮・園長室・事務室・プレールーム他)について、船橋市事業として大規模修繕工事が施工されている。長く暮らしたその建物はグレーの囲いがめぐらされ、工事現場ゲートには警備員さん。これから本格的な工事が始まり、大型車両等の往来も増える。工事を横目にその完成と新しい生活を楽しみにこの一年間利用者さんの生活を安全に守っていくことが今年の運営の基本である。

さて、バリアフリー新棟に移動した北総の里の生活。2階男性棟の各ユニットは、8〜9室に20畳ほどのリビング・洗面所・広いトイレがある。各寮の名前は、「風寮」「林寮」「火山寮」。戦国武将武田

信玄の座右の銘「風林火山」である。「人は石垣、人は城」立派な建物に負けない、まっすぐな心意気のある職員がこの人達を守る。3階の女性棟は、「のぎく」「あざみ」「たんぽぽ」と野の花の名前。「二期一会一輪の花」の精神でこの人達に寄り添ってほしい。いずれも昭和49年から北総を守り続けてきた武井園長の理念である。

各部屋には、手づくりののれん、手芸介護班の刺し子刺しゅうのついたベッドカバーが掛けられ、季節の花が風に揺れている。今まで相部屋だった人が個室になった。浜崎さんは念願のテレビを自室に入れた。個室なら、ごろりと多少だらしない恰好で横になっても平気だ。日中仕事で汗を流してくる大人が、自分だけの自由な空間を持つことは当然のこと。今はまだ25部屋がツインだが、本館改修工事が終われば全てシングルになる。今後はますます要介護者が増える。帰る家庭のない方も増え

る。その時、一人ひとりに丁寧に寄り添う職員がいなくてはならない。若い職員も増えた。私が入職した頃は、年上の利用者さんも両親位の年齢であったが、今の若い職員さんにとっては、祖父母以上だ。今は車椅子のその人が昔は自転車に乗って買い物に行っていたこと、今は鉢の竹ひご磨きをしているその人が弁当を携えて革製品の工場に毎日働きに行っていたこと。皆サイクリングや踊りクラブで沢山出番があった頃のこと。そんな大切な過去のこともユーモアに包んで職員に伝えながら、この北総の里で意欲を持って仕事をづけられる環境を大切にしたい。

北総40周年を迎えて思うこと。「不易流行」。変わらない本質と、新しい取り組み。新しい物を取り入れなければ本質は維持できず、新しいこともまた源流を知らなければ発展できずという。福祉事業も然り。北総も然り。我々一人一人もまた然り。

今年もこの人達の笑顔と共に働き暮らす毎日を重ねて参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



村議会だより

112

去る12月12日、東庄ライオンズクラブ招待クリスマス会があった。もう30数年のお付き合いで、毎年温かいおもてなしを受け、利用者も本当に楽しみにしている。招待と言っても全てライオンズクラブの皆様にお任せするのではなく、北総側からも少しでも楽しんで頂ければと若手職員中心にダンスの披露をしている。上手い下手はともかく日頃から園長が言う「職員が恥をかくことが大切」という精神に則り、今年人気アイドルグループAKBのダンスを披露。新職員の諏訪さんがとても上手で諏訪さんを中心に大いに盛り上げてくれた。このダンスを含め、職員の動きを見たライオンズクラブの方に、「招待する立場でありながら、毎年招待してもらっているように思う。こんな職員さんがいる中で生活する利用者の皆さんは本当に幸せだろう」と、とてもありがたいお言葉を掛けて頂いた。職員にとつてこれ程の褒め言葉はないと思う。(菅倉)



▲北総版AKB!?
利用者も飛び入り参加し大盛況のステージ。
H25・12・12

沖縄の心の

「繰り返し、自然・命・平和」を言葉に

表紙でも触れましたが、今号より4回に渡り、蒼生学園の砂川施設長より「沖縄の心」と題しまして様々な視点から見る「平和なくして福祉なし」の思いをご寄稿頂きます。砂川先生は近藤原理先生の思想に深く共感され「沖縄なずな合宿研」の主催者でもあります。昨年6月に開催された第21回沖縄なずな合宿研には北総からも武井園長始め3名の支援員が参加させて頂きました。第一回目の「沖縄の心」はアメリカの基地問題について寄稿頂きました。

ゆれる基地移設問題

蒼生学園施設長

砂川 好彦

武井敏朗施設長より「沖縄の心」と題して3〜4回の連載で寄稿の依頼がありました。大きなテーマと専門外の事でお断りすべきところ電話の向こうの武井先生の穏やかな顔が思い浮かび断りの言葉が失いました。少しでも沖縄について伝える事が出来ればと思いい、そ

の他大勢の県民の一人の私なりに綴ってみたいと思います。

沖縄には、現在30箇所近くの米軍施設が点在しています。東京ドーム400個分が優に入る嘉手納基地から直径200mの通信基地まで大小様々です。基地は全て金網で囲まれ上部には刑務所とは逆向きに鉄条網が張り廻らされています。沖縄本島を北へ進むといたるとところに金網です。「沖縄に基地がある」ではなく「基地の中に沖縄がある」が正しいのではないかと考えます。さて、今大きな基地問題は、返還が決まっている宜野湾市の米軍普天飛行場の移設問題です。国は名護市辺野古に移設の方針で進めています。米兵による民間への暴行、ヘリの墜落、オスプレイの配属等で世論が沸きあがり何度も県民大会にまで発展しました。それによりついに知事も含め保革が一致し、県外、国外への移設という方針に変わりました。しかし、2013年12月28日県知事は、辺野古岬の埋め立てを承認しました。県内賛否両論で2014年の年が明け、移設問題を争点とした名護市長選挙が1月19日(投票、即日開票)で行わ

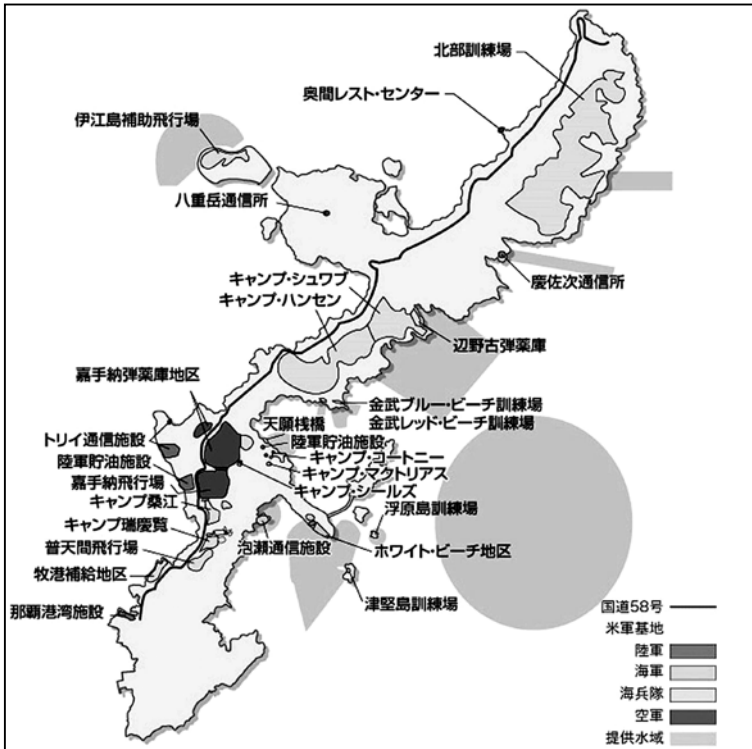
れました。結果は埋め立てに反対する現職の稲嶺進市長が、移設推進を掲げ自民党の推薦を受けた前県議の末松文信氏に大差をつけて再選されました。自民党の石破茂幹事長は告示日の12日「基地の場所は政府が決めるものだ」断言し、名護入りした16日「地域振興に向け新たに500億円の基金をつくる」と述べました。いわゆるアメとムチです。しかし名護市民は自立を選択しました。県内観光業界の重鎮が「観光は平和産業だ」として基地撤

去の姿勢を打ち出した事も勝因の1つとなりました。

基地問題に関心を持つ本土の方が多くなっています。同情しながらも「基地がなければ困るでしょ」と沖縄が基地

経済に大きく依存しているように言われます。また地域振興のための国庫交付金が他県に比べ特別に多いと考えることから本土の方の基地問題への関心を低下させたり、正当化する要因となつています。基地関連収入は県民総所得の5% (復帰時15%) であり、交付金は都道府県別で12位 (沖縄県公式ホームページ) です。

基地問題については、日本国民全体の正しい理解と負担の分担が必要だと考えます。



長崎の姉
またる

普賢学園姉妹交流

「繰り返し、自然・命・平和」を言葉に

11月25〜26日と普賢学園の皆様が来園されました。新しくできたバリアフリー棟も見学して頂き、短い時間でしたが、長年築きあげてきた絆もより一層深まったと思います。今回訪問された、本田さん、北岡さん、近藤さんより感想を寄せて頂きましたのでご紹介します。

北総育成園を訪問して

普賢学園 スーパーバイサー
本田利一郎

私どもにとって、北総育成園との姉妹施設間の交流は一年の中で、特に大切な日であると共に、私自身二十代最後の節目の年に訪問できた事は、大変有意義なものであった。

11月25日は北総の懇切丁寧なお出迎えに始まり翌日の出発までの束の間の一時ではあるが、21年に及ぶ双方の交流が継続していることは、「縁」だけではないように感じる。交流のそもそもの始まりは当園の現園長本田利峰と北総武井敏朗園長がアメリカの研修で二人が出会った事がきっかけである。

最近、つくづく思うのは、個の思想等から始まる理念や方針、方向性を組織として社会へ表現する上で、最も重要な事は、それを、現代社会

へどう具現化するかだと思う。どんなに時代が変われども、その方向性や理念なるものは、その時代時代に姿・形を変えながら脈々と受け継がれていく。それが伝統であり伝承ではないだろうか。

近年の法や制度の改正・制定によって新たな価値として生まれたものもあるが、同時に失われたものもある。報酬単価や制度の動向を見ていても、旧入所施設の必要性は今やタブー的存在だが必ずしもそうではない。

人は過去や未来を生きているのではなく、ただひたすらに今という瞬間を生きている。歓迎会の中で、北総名物の芸座を経験年数が長い利用者の方々を中心に、老若男女の職員の方々が一生懸命に且つ、実に楽しそうに踊っていた。その姿を目の当たりにすると到底、言葉や文字では表現することが出来ない「共生」が確かに存在していることを実感した。

思うに、この北総には表面上や上っ面だけの関係性ではなく本当の繋がりが存在する。その中で生活出来るという事は、とても幸せな事だと思ふ。

幸せ・自己実現・尊厳etc.あるが、年齢・性別・生活歴・環境・価値観が全て違う中で、何十人と共同で生活することは決して簡単な事ではな

い。さらに年齢や体調と共に変化していく食事方法や入浴方法、服薬を含む体調管理や医療関係まで加えると、「その人の人生を支える、寄り添う」と言う事を実践する事は想像以上に難しいし、また、その中で、「障がい」や「個人」を認めた上で現状を受け入れ、尚且つ責任がある中で対等性を持ち続けることは、決して容易な事ではない。

しかし、24時間365日の中での利用者との関わりを、何十年と過ごし続けると、不思議と、時には兄弟であり親子であり友人である様な感覚を持つ。それが現代的に適切かどうかは別にして個人的には入所施設と「真摯に向き合う姿」の結果だと思ふ。

新棟を除けば建物が特に新しいわけでもなく、機能的にも近代的とは言いがたい。しかし、利用者の方が年々重度高齢化する中にあっても、職員の真剣な気配りと本気の対応は変わらないし、それに対して利用者は満面の笑みでお返りする。

その風景を、一輪の花に込められる美学を堪能しながら眺めていると、素朴さの中にも優しさがあり、優しさの中にも厳しさがある事に気づく。それらの結果、個人としての存在

感や存在意義においても、この北総では、例えば、最近良く耳にする、言葉使いや呼び方といったコミュニケーションシジョン方法においても「その人の存在」を実感することが出来る。

そして、その光景は普遍的な常識さえあれば、何も特別な事ではなく、ごく当たり前の事であって、当事者を除いた議論の必要性は皆無であるという事を共感させる。

要は、本質的な事は、そこまでの関係性を築けるかどうかではないか。つまり、長い歳月をかけ、共に汗を流し同じ釜の飯を食べ同じ屋根の下で床に就く、また多くの喜怒哀楽を共有しお互いの必要性を認識して初めて持てる共通認識であって、それは決して短期間では成立しない。

近年、接統的且つ安定的な要素に欠けながらも、急速に進展していく法や制度、それらに振り回される現状の中にあっても、この北総には明確な理念を具現化するリーダーとそれを支える人材が居り、それを求めている仲間が居る。そして長い歳月をかけても尚、お互いが共に認め合うからこそ発揮できるエネルギーとパワーが存在し続けている事を再認識した一日であった。

この度は、武井園長先生をはじめ、職員・利用者の方



▲普賢学園の皆様と北総芸座連。遠く離れて暮らす姉に芸座披露できる年に一度の晴れ舞台。H25.11.25

様には大変お忙しい中、貴重な経験をさせて頂き深く感謝申し上げます。今後も変わらぬ御指導の程、宜しくお願い申し上げます。

普賢学園 チーフ主任支援員

北岡 里恵

この度は北総育成園を訪問させて頂き、武井園長先生はじめ職員の皆様にはお忙しい中ご配慮いただき、ありがとうございます。

訪問当日の天候は雨が心配されましたが、訪問の際は不思議と雨が降らないという印象の通り、最後まで雨も降らず見学させて頂くことができました。

今回の訪問では、出来上がったばかりの新棟を見せて頂くのを特に楽しみにしていました。真新しい館内には利用者が過ごしやすいよう、職員が働きやすいよう随所に工夫が施されており、居室には活き活きとした一輪の花が飾られ、画一的ではないそれぞれ個性的な空間でした。北総育成園の理念が実践されているのをまざまざと見せられたようでした。交流会での芸座で武井園長先生は「踊りが下手になって」と謙遜されていましたが、皆さんの堂々とした姿を見ていると、私も一緒に踊りたくなるようでした。

夜の懇親会では、利用者の堀川さんの姿に感動しました。周りのグラスが空になっているのに気付くとすぐ「どうぞ」と言って注いでくださり、

その気遣いにもますますお酒がすすみました。社会性というのはこういうものであり、職員の方々が心を尽くして接しておられるのを垣間見たようで、今後の自分の支援に活かしていきたいと思いました。懇親会で、利用者・職員が一緒になってお酒を酌み交わし、気兼ねなくお互いの仕事や人生について語り合えたことは、姉妹としての絆を確信し、深めることのできた大変楽しいひと時でした。

楽しい時間は瞬く間に過ぎ別れの時に、何度も訪問させて頂いている利用者も初めての利用者も一緒に名残惜しそうにしているのを見ると、姉妹としての交流が始まって二十数年の重みを感じずにはいられませんでした。

帰園後は早速お土産をたくさんお送りいただき、ありがとうございます。

これからも姉妹としてますます絆を深めていくことができたら幸いです。今後ともご指導の程、宜しくお願い致します。

普賢学園 主任支援員

近藤 哲生

拝啓 寒冷の候 北総育成園の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、先日の北総育成園訪問の際は、武井園長先生を始め職員・利用者の皆様には、お忙しい中盛大な歓迎をしていただき誠にありがとうございます。

ございました。今年には東京のたすかるステーション竹ノ塚にまでお迎えにきていただき、竹ノ塚の利用者・職員、北総育成園の職員の方々、また普賢学園の利用者・職員など短い時間ではありましたが、3事業所間での大変有意義な楽しい交流が図れたことを本当にうれしく思うと共に、人間関係の広がりの可能性を強く感じた次第です。

私自身は北総育成園を訪問させて頂いたのは実は今年で3回目なのですが、

北総育成園の感想について

北総育成園を訪問して本当にありがとうございました。色んな作業を見学させてもらいました。色んな作業を見学させてもらいました。色んな作業を見学させてもらいました。色んな作業を見学させてもらいました。

北総育成園さんへ
近藤七五三也

北総育成園の感想について

北総育成園を訪問して本当にありがとうございました。色んな作業を見学させてもらいました。色んな作業を見学させてもらいました。色んな作業を見学させてもらいました。色んな作業を見学させてもらいました。

北総育成園さんへ

さようなら
近藤七五三也

ですが、昨年はまだブルーシートをかぶっていたバリアフリー棟も今年は立派に完成しておりました。

すべりにくい材質を使ったトイレの床や、利用者の方の居室の引き戸に取り付けられた衝撃吸収用のゴムやクッション、各部屋の出入口に掛けてあった手芸班手作りの素敵なもの、また居室や廊下、食堂等園内の至る所に飾られた一輪の花など、利用者の方々が如何に快適に生活できるかが細部に至るまで配慮されており、丁寧に案内していただきながら大変素晴らしい園舎だなあと只々見とれておりました。

また、エレベーターや園舎出入口へのカメラの設置、非常階段出入口ドアのオートロックなど防犯にも力を注がれておりました。

物騒な世の中であり、施設もすぐに新聞沙汰に取り上げられる今の時代、利用者・職員を問わず、本当に自分たちの身は自分たちで守つていかなければなりません。

当園もこれまで以上にリスクマネジメントと危機管理に努めていく次第です。

歓迎会では北総芸座連の芸座演奏、またお互いにお土産の交換なども行い、北総育成園の皆様の心温まるお出迎えに昨年同様感激いたしました。

これからもこのような交流を続けるよう末永くよろしくお願い致します。 敬具

街道をゆく 124

片雲の風にさそわれて

四国八十八寺巡礼の旅

武井 敏朗

日曜日、日テレ午前7時30分「どこか遠くへ」という旅番組があった。...

抱えていて、保護者と施設は利害相反なんてことになってしまっている。...



▲四国八十八力所参りの一番札所、徳島県の霊山寺に立つ。"あられ"が舞っていた。H26. 1.26

護者であるとおちゃんかあちゃん。そして40年の戦友であるこの人たち。...

1月26日(土)、千葉は小雨。朝一番、鶏に餌やつて、さあ出発。...

先ず仁王門に一礼。本堂でお灯明と線香を手向け、今回の巡礼の手合わせ。...

とひといき随想

ナナコたち

利用者見えなく 寂しそう

新棟へ映って早5ヶ月。先日、旧棟が完全閉鎖になり、旧棟の改修工事が始まった。...

(安藤)

太田川のほとり 122



「繰り返し、自然・命・平和」を言葉に

皆さんは「ペコロスの母に会いに行く」という本をお読みになったこととはあるでしょうか？2012年7月に西日本新聞社から出版された岡野雄一氏原作のエッセイ漫画です。岡野氏の認知症になった母の「今」と「昔」の日々が、優しくほのぼのとしたタッチで描かれています。私がこの本に出会ったのは昨年の6月。武井園長が世間でじわじわと人気になっていったこの本に着目、その内容の素晴らしさに共感し「北総の職員も是非読んでみて」と購入して下さいました。そして今回、広報紙「北総の里」の編集会議で園長から「ペコロスの母に会いに行く」の中で一番好きなものを掲載し、自分の思いを書いてみたらいかがかと助言を頂きました。それは私にとって特別



▲岡野雄一著 西日本新聞社「ペコロスの母に会いに行く」より

な意味を感じるものでした。何故なら私自身、認知症の家族を介護する実体験があったからです。13年前に82歳で亡くなった祖父の事です。祖父は厳格で気難しい気質の人でしたが、私たち孫には滅法甘く、それこそ「目の中に入れても痛くない」と可愛がってくれました。そんな祖父も80歳を迎える頃から少しずつ物忘れが酷くなり、所謂「認知症」と思われる症状が出てきました。祖母と母が主に介護にあたり、勤めていた私は時々しか祖父と接することはありませんでしたが、どうしても認知証になる前の祖父と今の祖父を比べてしまい「おじいちゃん、何で？」と声を荒げてしまう事もありました。どこかで「福祉の専門職の私がかちゃんとしてなくては」と気負いがあって、でも私にとっても初めての経験でど

接すればいいのかわからず、祖父を責めるような言動をとってしまいました。今考えれば本当に申し訳ない事をしてしまったと思います。最後の数ヶ月は老人保健施設にお世話になり、少し余裕もできたせいか笑顔で接する事も増えましたが、今でも「もっと優しくしてあげれば良かった」と後悔の気持ちが捨てきれません。あんなに可愛がってもらったのに何の恩返しもできませんでした。「ペコロスの母に会いに行く」はその時の気持ちがよみがえり思わず涙するページも多くありましたが、読み終えると何とも温かい気持ちになりました。

さて、今回私が選んだ一番好きなシーンは「縫う母」です。明け方、布団の縁を縫う仕事をしている母の頭の中は数十年前に遡り、「我が子の為に」と夜なべをしているのでしょうか。このシーンで思い浮かぶのは祖父の事、そして北総の高齢となった利用者の方々です。北総も高齢化が顕著になり身体機能の低下だけでなく、認知症と思われる利用者さんにもいます。排泄介助や移動介助など直接的な介助だけでなく、その方の気持ちにまで寄り添った支援が重要です。そして「もっと重要なことは「今の姿がすべてではない」という認識をきちんと持つ事です。当然の事ですが急に年を取る人はいません。現在高齢となった利用者の方々も20、30代の働き盛りの時期がありました。知的障害であることを引き受け仲間と共に「働くこと生きること」の生活に身を置き一生懸命働いてきました。その中で仲間を思いやる心を育み、職員の事もうんと助けてくれました。我々はこの姿を決して忘れてはいけません。園長もその事をこうメッセージしてくれました。「今、年を取って不如意を抱えている人たちは突然そうなったわけではない。若い時から一生懸命頑張ってきたからこその姿がある。それは心の貯金だ。今はその貯金を使って介護を受けているのだから、職員は常に謙虚な姿勢を持つこと。そしてこの人たちの後ろには我が子のためにいつも心を寄せてくれる親の存在がある事も忘れてはならない。鬼籍に入られた保護者も多くなった今、改めてその親の思いに真摯に寄り添わなければ」。若い職員も多くなった現状において、利用者の若い頃の様子を先輩職員が意識的に伝える事も重要だと思います。自分の不如意を自分で訴える事ができない利用者にとって、我々職員が心強い味方であるように、年を取ることは時に辛いと感じる事はあっても決して惨めなものではないと思えるように、我々職員が多量の言葉と専門性を持ってチームとしてその人の心に寄り添えるように。「ペコロスの母に会いに行く」を読んで改めてそう強く感じました。(絵鳩)

「繰り返し、自然・命・平和」を言葉に

みんなの広場

①3回目の切干し作り

農耕班は今年も冬の勝負の時期になった。秋に蒔いた大根がよく育ち、切干し作りが始まった。農耕班の全員で収穫だ。冬でも汗をかきながら大根を運び、力を合わせて洗う。皮を剥いて切り、干し場へ広げる。いつも以上に天気を気にしながら乾燥させていき取り込む。この取り込むタイミングが難しく、空と風と大根とにらめっこ。良い物が出来ると嬉しいし、色合いが悪ければ次回の参考に。忙しさを楽しみながらの切干し作りは本当に北総の冬を感じさせてくれる。

保護者の皆様や、販売を楽しみにしてください。お客さんに言っていただけの「おいしいです」の一言が何よりの励みになる。今日も寒空の下で農耕班の利用者と職員は、待ったなしの勝負に挑んでいる。(加瀬)

②新原木届く

今年も3500本の新原木が会津から届きました。利用者の石井さん、菅谷さん、坂下さん、石毛さんが一緒に下ろすのを手伝ってくれました。とても重く、何と言っても雪がついていたり、凍ってていたり冷たく手が麻痺してしまいそうなので、「自分だったら頼まれていなかったら



▲今年も切干しの季節がやってきた。おいしくなれと願いを込めて干場一杯に大根を拡げる。H26.2.7

やらないかな」と思います。それでも利用者は弱音を吐かず黙々と運んでいました。正直利用者にも手伝って頂かないとかなり大変だったのは間違いないので、本当に助かりました。日々の仕事でもそうですが、手伝ってくれる利用者なしでは成り立たないのだと改めて感じました。そして立派に運んでいる利用者を見て、「働く事生きること」とはこういう事なんだなと思えました。普段から利用者にも支えてもらっているという事を忘れず、これからも利用者を支援していきたいと思えます。(加茂)

雪ついたら原木運び手も凍る。

雪ついたら原木運び手も凍る。

林直子



③一年を振り返って

自分は、北総につとめて早一年になる。入職した昨年二月。何もわからない私に優しくしてくれた利用者の方々、先輩職員。毎日毎日楽しい。四月に入り林産班から紙工芸班へ異動となった。体を動かすことも好きだが細かい作業をするのも好きだったので興味があった。やってみると叩きは単調な作業で毎日叩き続けている利用者さんを見て私には正直マネの出来ないことだった。和紙すきもとても難しく何度も何度もやってはやり直しのくり返しで自分の納得がいかなかった。絵つけも、とても神経を使う仕事でなかなか難しかった。楽しさ反面、自分の無力さをたくさん感じた。

北総に来て、私は人に恵まれたとよく思う。利用者の方々、先輩職員の方々にとても感謝している。感謝の気持ちを仕事で恩返ししていきたい。(藤原)



▲厳寒早朝7時。白い息を吐きながら雪を被った原木を下ろす。H26.1.26

編集後記

まだまだ寒い日が続く今日この頃。そんな寒い中、毎日作業に励んでいる利用者さん。所属する紙工芸班にて、「手が冷てえんだよ。」と言いつつも、楮の皮むきを頑張ってくれているTさん。その姿を見て、水の冷たさに私も負けてられない!と思うのでした。早く暖かくなるといいですね。

さて、今回初めて編集長を務めさせて頂きました。文章を書くのも読むのも苦手な私が、何で広報委員会に入っているのか不思議であり、不安でもありました。編集長と言っても絵鳩課長の背中を見ているだけの名ばかりでしたが、一から教えて頂き広報紙を作るにあたっての流れを知ることができました。お時間頂き本当にありがとうございました。また、みんなの広場では職員の方にたくさん一枚読んでみて、その時の利用者さんの様子や表情が思い浮かび、職員の方の思いも感じる事ができました。今回も無事に広報紙を発行できたのも皆さんのおかげです。ご協力ありがとうございました。(内田)

